

熱帯の有用材 (3)

緒 方 健

イディグボ (Idigbo)

学名: *Terminalia ivorensis* A. Chev. (シクンシ科)

モモタマナ属 (一名コバテイシ属, *Terminalia*) は 200~250 種の低木~高木およびつる性の樹木からなり、世界の熱帯を中心に分布する。そのうちモモタマナ (コバテイシ, シマボウ) *T. catappa* L. は東南アジア~太平洋地域の海岸に広くみられる中高木で、北限として琉球、小笠原にも分布し、またしばしば人家周辺に植えられる。この属の樹木は樹皮や果実に良質のタンニンを含むものが多い。とくにインドの *T. chebula* Retz. の陽乾した果実は 25~50% のタンニンを含み、ミロバラン (Myrobalan) の名で知られる。木材の利用上ではまずインド~ビルマの Indian Laurel *T. tomentosa* Wight et Arn. があげられる。これは心材暗赤褐色で濃色の稿をもち、わが国では装飾用材、ことに床柱として利用される (銘木業界ではこれを“月桂樹”と称しているが、もちろんクスノキ科のゲッケイジュ *Laurus nobilis* L. とは全く別物である)。また近年、東南アジア~ニューギニアからこの属の木材がわが国に入ってきている。樹種はさまざまであるがターミナリア (*Terminalia*) と総称され、淡色、低比重の木材が多く、主に合板に用いられる。

さて、アフリカの熱帯にもかなりの種類があるが、その多くは比較的乾燥した地域の樹木で、一般にあまり大きくならない。その中でここにとりあげたイディグボともう 1 種リンバ (*Limba: T. superba* Engl. et Diels) は熱帯西アフリカの湿潤な降雨林地帯に生育する大高木で、木材の利用価値が高い。

イディグボはギニアからカメルーンにかけての常緑樹林および半落葉樹林に分布し、後者の方によりふつうにみられる。原生林ばかりでなく二次林中にもしばしば生育する。しかし地域的にまとまって存在するということはなく、広い範囲に散生し、平均的には大径木は 10 ha に 1~2 本程度しかない。木材の主産地はコートディヴァール、ガーナ、ナイジェリアである。

イディグボはナイジェリア地方の名称で、英語圏で広く用いられる。一方フランス語圏ではコートディヴァール名の Framire (フラミレ) が通用している。またガーナ名の Emeri (エメリ) が用いられることもある。したがって木材は輸出地によってこれらの異なった名称で呼ばれている。ときにはまた Black Afara と称されることがあるが、これは Afara (アフアラ) すなわち *T. superba* に比し樹皮が黒っぽいためである。しかしこれはまぎらわしい呼び方なので、少なくとも木材に対しては使用しな

OGATA, Ken: Useful Timbers in the Tropics (3) Idigbo

農林水産省林業試験場木材部

い方がよい。

樹木の形状：落葉樹で、高さ40～45m、直径1～1.5mに達する。枝下高は20～25mあり、幹は通直、円筒形だが、下部はたて溝が入って断面が不規則のことが多い。板根はふつう低く、鈍く、あまり著しくないが、ときにはたて溝状に高くまで達することがある。樹皮は若木では灰色で平滑だが、しだいに暗褐色～灰黒色さらにはほとんど黒色になり、たてに細かく割れてくる。内樹皮は外方が褐色、内部では黄色で、空気にふれるとすぐ汚ない黄褐色に変る。モモタマノ属の樹種（例えば *T. catappa*）によくみられるように、枝は若木では輪状に、水平に出て、特徴的な層階状をなすが、生長するにつれ枝は上向きになり、この特徴はうすれてくる。

葉は互生し、単葉で長さ5～10（～15）cm、幅2.5～4.5（～6）cmの楕円形、葉柄長0.7～1.5cm。乾季に約3ヶ月間落葉する。花序は長さ7～9cmの総状花序で、葉腋に生じ、上部に雄花、下部に両性花をつける。花は径約5mmの淡黄色の小花で、がくは5深裂し、雄ずいは10、花弁は欠く（ただし一部の花でがく片10、雄ずい20のことがある）。果実は翼のある堅果で、1個の種子をもつ。翼はたて方向に長く、長さ5～7（～10）cm、幅1.5～2（～2.5）cm（この点 *T. superba* の果実の翼は横方向に長い）。果実には虫蟻ができることがある。毎年豊富に結実し、伐採道路沿いや荒廃地などで盛んに更新しているのがみられる。生長が早く、材は優良なので、熱帯アフリカの主要な造林樹種として用いられている。

木材の特徴：辺心材の区別は不明瞭で、新鮮時には淡黄色を示し、のちオリウ色～黄褐色～淡褐色になる。鉋剖面にはやや光沢がある。肌目はやや粗、木理は通直か交錯し、またしばしば波状に乱れて装飾的なリボン杻を現わすことがある。生長輪が明瞭なことが多い。気乾比重は0.37～0.75と変異の幅が大きい、0.48～0.62の範囲のものがあるが、平均0.55。孤立管孔の接線方向の径は170～260 μm 程度、最大300 μm 。分布数は3～5/ mm^2 。放射組織の最大幅は個体により2～4列だが、2～3列のことが多い。軸方向柔組織は周囲状～翼状に道管を包み、部分的に連合翼状に連なる。結晶、シリカは含まない。傷害樹脂道が存在することがあり、木口では同心円状に配列する。道管にはしばしばチロースが発達し、木口できらきら光ってみえる。

乾燥は速やかで、割れ、狂いが少なく、乾燥後の寸法安定性もきわめて高い。生材から絶乾までの収縮率としては14.2%（体積）、6.2%（接線方向）、4.6%（半径方向）の値が出されている。1.5インチ厚さまでの板の乾燥ではシナノキ、スプールのスケジュールが適用できるという。強度は比重相当であり高くなく、とくに衝撃強度は小さい。また曲げ木加工には適さない。菌には犯されにくく、淡色、軽軟材としては耐久性が高いが、穿孔虫、ヒラタキクイの害はうける。心材の薬剤注入はきわめて困難である。工作は容易で、仕上りも良好である。塗装性、接着性にも問題はない。

イディグボは材の外観もよく、加工性もすぐれ、全般に欠点の少ない木材なので広い用途がある。唯一の欠点といえばしばしば脆心を有することで、とくに大径材に多い。この部分は乾燥に際しても割れが起きやすいし、強度が低いから使用上注意を要する。イディグボの主な用途は建築造作材、家具、軽量床板、合板などである。材にタンニンを含むので、濡れた状態で鉄に接すると黒く汚染する。